
私はゴッホに似ている

堀田マサヒコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私はゴッホに似ている

【Nコード】

N5799G

【作者名】

堀田マサヒコ

【あらすじ】

私はゴッホに似ている。彼がそう言ってくれた。彼のおかげで私はここまで来れた。今なら語れる。苦しみを。喜びを。

京子はゴッホに似ている、と彼は言った。

私は先月、プロポーズされた。

今は結婚式を挙げる準備をしながら、二人同じ家に住んでいる。
こんな事が現実にかかるなんて、数年前の自分は夢にも思わなかった。

そう、本当に夢にも思うことはなかった。そんなことは私にとっては全く無関係なことだった。結婚ということを考えることすらしなかった。

そんな私が結婚できたのは、私が描いたこの絵のおかげだ。

彼がこの絵を褒めてくれた。たったそれだけのことだが、それが本当に嬉しかった。

私に希望の光をくれたこの絵をいつでも見られるようにと、彼はリビングに飾ってくれた。描かれた一枚の絵は、インテリアと呼ぶのには陳腐な気がしたが、それでも部屋を明るくしてくれる。

本当に、この絵のおかげだ。

「京子。行ってくるよ」

「行つてらっしゃい」

彼が会社に向かう時、必ず私の名前を呼んでくれる。

思えば彼は出会った時からずっと、名前を呼んでくれる。

私は『京子』という名前が嫌いだった。私の苦手な人は皆、私のことを『京子』と呼ぶからだ。

でも彼のおかげでこの名前が良かったと思えるようになった。彼が『京子』と呼んでくれるだけで、幸せな気持ちになれる。

部屋に私と絵だけが取り残される。

今なら語れそうだ。

私は今、幸せだ。でも幸せに辿り着くまでには、様々な苦しみがあった。その苦しみを忘れたことは無い。たとえ幸せでも、この苦しみを死ぬまで忘れたくはない。

今なら語れる。そんな気がした。

苦しみを。

そして、今の喜びを。

私、磯崎京子には二人の母親がいた。

私を生んでくれた母親と、私を育ててくれた母親だ。

父は三歳の時に離婚した。そして五歳の時に再婚した。

二人の母は対照的だった。

私を生みの母は大人しい女性だった。離婚してから。そして、再婚してから、幾度とあっているが、とても落ち着いた女性だと今では思う。

離婚してから結婚するわけでもなく、一人で生活をしているという。

私がいに行くと、喜んで家に迎えてくれる。

しかし、ふとした瞬間、顔が歪むのだ。

私を育ての母は活発な女性だった。始めて出会った時から今まで、

元気な女性だなという印象が残る。それは私だけではなく、父もそう思っているようで、二人でよくデートと称して、出かけていた。しかし、ふとした瞬間、私に対して怒りとも悲しみとも言えない表情や言動をするのだ。

私は幼いながら、二人の母親から嫌われているんだ、ということがわかった。

私という存在が、邪魔なのだ。

二人の母親は、父との二人だけの生活を望んでいるようだった。どうしても私という存在が邪魔であるから、私を家に残して出かけていたりする。私が嫌だから離婚したりする。私という存在は家族にとって邪魔なものだった。

それが顕著になるのは私と二人きりの時だ。
特に育ての母はそうだった。

保育園の送り迎えを父に押しつけようとしていたが、どうしても母が行かなければならない時。保育園の先生の前ではにやかな笑顔をを見せて、良い母親というのを演じていた。しかし家に帰る為に車に乗ると、途端に表情が変わる。

最初はそうだった。表情が変わるだけで済んだ。

だが歳が上がるに連れて、二人きりの時だけ、言葉を言うようになった。

「京子。自分で何とかしなさい」

「京子、もっと我慢しなさい」

「京子にはそんなものは必要ないの」

その度私のことを『京子』と呼んだ。京子の呼び方が怖かった。その名前を聞くだけで背筋に寒気が走るようになってしまった。

小学生になったころには、二人きりになるといつもこう言った。
「京子がいなければどれだけ幸せか」

私という存在が、少なくとも、育ての母にとっては邪魔な存在であつた。

そのせいか、私は生みの母を頼るようになった。

そこは小学生にとっては遠い場所だつた。電車で一時間乗つた先にある場所だつた。その場所まで父と一緒に向かつた。

生みの母はいつもにこやかに迎えてくれた。

私は学校の話や家族の話をこぞとばかり話した。

その話を頷きながら訊いてくれる母が好きだつた。

しかし通つて半年たつた頃、インターホンで生みの母は用事がある、と言つて断るようになった。始めは用事があるのならしかたがないと思うようになった。しかし次の月も、その次の月も、用事があると言つた。

父に生みの母の家の電話番号を教えくれ、と頼んだ。電話だつたら何ら問題がない。その事実気づくのに、三ヶ月も過ぎてしまつた。

しかし何度電話を掛けても用事がある、の一点張りだつた。

私は一度、言つた。

「家にいるのに何で用事があるの？」

母はしばらく黙つたあと答えた。

「京子。あなたの話を聞くのは疲れたの。私にも私の事情があるの」

私は、ああまたか、と思つた。

育ての母と同じだと気づいたのだ。

二人の母親から嫌われた私は、何をやっても怒られてしまいそうで怖かつた。

実際、私は勉強も運動もどちらかと言えば、できない方だった。
「京子。あなたは何にもできないのね」
と母はよく言った。

父の前では頭を撫でて、褒めてくれるのだが、それは仮面を被った偽物の母だと知っていた為、私は何をしてもダメなんだ、と思うようになった。

それが、彼のおかげで変わった。

小学二年生の時だった。

新しいクラスになった時、すぐに係を決めることになった。そこでみんなが嫌がる学級委員を自ら行った人がいた。

それが彼。中田友輝だった。

私はよく絵を描いていた。

それは同年の友だちが描くようなマンガではなく、絵画と呼ばれるタイプのものだった。これといって目立つようなタイプじゃない私はよく休み時間になると、教室から図工の時間に使う絵の具を取りだして、黙々と絵を描いていた。

ある日、教室に友輝と二人だけ残ったことがあった。

友輝が私に話し掛けてきた。

「何描いてるの？」

「みんな」

「みんな？」

「うん。みんなすごく楽しそうだから、描いてるの」

私は正直、友輝と話したくなかった。友輝はみんなの人気者で、先生や保護者からも好かれている。そんな友輝が目立たない、何の

取り柄もない私と話すのは不釣り合いだと思っていた。「京子って、絵、凄くうまいんだな」

初め、何を言われたのか理解できなかった。理解できない言葉に遭遇した時、いぶかしがることを初めて知った。

だから変な表情で友輝のことを見たのだと思う。

「変な顔」

と笑った。

「京子ってそんなに絵がうまいとは思ってなかった。俺がクラスで一番絵がうまいと思ってたんだけど、違ってたんだな」

私は訳が分からなかった。

「やっぱり変な顔」

と言われた。

思えば、私の絵を認めてくれた人は友輝が初めてだった。

そんなことを言われたのは初めてだった。私自身に何の意味も価値もないと、二人の母親から無意識に教わっていた為に、私が生み出した作品にはもちろん、何の意味も価値もないと思っていた。

そんな私に意味も価値も与えてくれたのが、友輝だった。

それに。

「友輝くんって絵、うまいの？」

みんなから慕われている友輝が、絵がうまい？

それが謎だった。

もつと活発なイメージがあったからだ。みんなを一つの方角へと引っ張っていくような、冒険の旅へと向かう舟の船長のようなイメージがあった。

そんな友輝が絵が好き？

「うまいよ。結構みんなから褒められてるよ。図工の先生からも褒められてたし」

じゃあ、そんな友輝に褒められるのは、凄いことなんじゃないか？

「すっげえよ。京子の絵、俺と比べものにならないもん」

「そうかな。友輝くんの方がすごいんじゃない？ 何でもできそう

だから」

「そんなことないよ。京子の方が絶対うまいよ。そうだ。今度絵を描いてもらおうかな。運動会とかで描く時にさ」

私はそんなことを言われたことがなかった。

「京子、何で泣いてるんだよ」

私は知った。優しい言葉を言われると、泣いてしまうということ。

そして。

私はこんなに優しい響きの京子、というのも知らなかった。いつも二人の母親から言われる京子というイメージがあつたからだ。こんなにも私の名前が優しいのだと、知らなかった。

「京子。俺のこと友輝って呼んでくれないか。俺の京子、って呼び捨てだから、京子も友輝って呼んでくれよ」

「ありがとう。友輝」

「俺、なんかありがとって言われるような事したっけ？」

してくれたよ。と言えなかった。嗚咽が込み上げて言えなかった。私を褒めてくれたのは、友輝が初めてだった。誰からも嫌われていたような気がしてならなかったからだ。

私は二人の母に褒められたことが一度もなかった。あつたとしても、それは嘘だとすぐにわかった。二人きりになればすぐに顔が変わったからだ。

楽しそうなみんなの絵を描く。それは私が入れないから描いていたのだ。

私が入りたくても入れない世界を、傍観者として描いて、入ろうと頑張っていたのだ。

それを褒めてくれるなんて思っても見なかった。

私は傍観者じゃなくても良いんだよ、と言われたような気がした。傍観者じゃなく、実際に世界の中に入っていけばいいんだ。

そんなところになくても良いんだよ。

私はそう感じた。

私はその絵を絶対に死ぬまで捨てないでいようと思った。

それから私は毎日のように、絵を描いた。

友輝に言われた言葉を、思いを、噛み締めながら、私は絵を描き続けた。

私のただの暇つぶしに目的が生まれた。

「友輝に褒められるような絵をもっと描きたい！」

私はただ描き続けた。何枚も、何枚も。

しかし。幸福とは幸福と感じた瞬間に消えてしまうものだと知った。

「みんな短い時間だったけど、楽しかった。ありがとう」

クラスの中心であり、太陽と言っても過言ではなかった友輝は、転校してしまったのだ。

友輝は同じ市内ではあるが、学区が違ふところへ引っ越すらしい。小学二年生にとって、違ふ学区というだけでも、永遠にあえないような距離に感じた。

まだ私自身何者でもないんだ、という事実が、ひどく腹立たしかった。

友輝がいなくなってしまうたら、私はどうなってしまうのだろうか。

私を唯一認めてくれた言葉が、段々遠くへ遠くへと離れていきそうなのがした。

友輝がいなくなった後も絵を描き続けた。

それは夏休みにある市が主催する小学生向けのコンクール作品を描いていた。

そのコンクールは自由参加で、夏休みの宿題ではなかったが、私は描こうと決心した。

それは友輝に会えるのではないか、と言う期待からだった。

友輝は言った。

「京子ってそんなに絵がうまいとは思ってなかった。俺がクラスで一番絵がうまいと思ってたんだけど、違ったんだな」

友輝も絵がうまいのならば、きっと絵に関することに興味を示すはずだ。

コンクールで入選した絵はしばらくの間、展覧会が行われるらしい。

その場であるのではないか、と言う期待を持ち、絵を描いた。

私はただ友輝に会いたかった。

友輝にもう一度褒められたかった。

友輝だけが生きる希望だった。

いくら二人の母親に怒られようと、気にならなかった。

クラスを中心であり、太陽であった友輝はいつの間にか、私の中心であり、太陽になっていたのだ。

ただこの事を親には内緒にしていた。

特に二人の母親には。

言ったところで馬鹿にされるのが見えていた。表面には出さなくとも、内心そう思うだろうというのが目に見えていた。

だから絵画教室に通わせてくれ、などとは絶対に言えなかった。

私自身の才能を信じるしかなかったのだ。

才能を疑ったのは小学六年生の秋だった。

何度も何度も描き続けているのに、コンクールにかすりもしないさすがに五回もコンクールに選ばれないことに自身を無くしてしまった。

私の絵にいったい何の価値があるのか？

私は絵がなかったら何か価値が残るのだろうか？

成長していくからだとは反比例に、心は醜く、脆く、なっていく。そんな気がした。

痛みを感じたのはそのせいだろうか。突然激しい腹痛が私を襲い、母の前で倒れた。

気がつくとき真っ白なベッドに寝かされていた。

「これはストレスから来る胃炎ですね。何かお子さんにストレスを感じさせるような出来事はなかったでしょうか？」

「いえ。私が見る限り、京子がストレスを感じているようには見えませんでした」

「そうですか。とにかく安静にすることが治ることに繋がりますので、数日間は入院というかたちになりますね」

私がストレスを感じているのは、私しか知らない。いや私すら知らなかった。

体が変調を来す程に、絵を描いていたのだ。

それでも休みたくなかった。誰が何を言おうと、絵を描くつもりだった。父親に私の部屋にある画材道具を持ってきて欲しい、と頼んだ。

そして来年描く作品の構想を考えていた時、呼び掛けられたのだ。

「京子、絵、うまいんだね」

息を呑んだ。もしかしてと思い、隣のベッドを見た。

しかしそこにいたのは友輝ではなく、別人だった。私と同年くらしい男子。

「どうして私の名前を？」

すると彼は目線を頭の上に向けた。そこには入院患者用の名前が書かれたプレートが貼ってあった。

私も彼のプレートを見る。

野村幸太。と書かれていた。

「僕も絵が好きなんだ。だから、ほら」

そういつてベッドの上に本を出した。

「ゴッホ画集？」

「そう。ゴッホ。知ってるよね？」

もちろん、と答えると幸太はゴッホについて語り出した。

「僕はゴッホの絵も好きだけど、ゴッホの人生が好きなんだ」

ゴッホの有名な逸話としてあるのが生涯絵が一枚しか売れなかったという話だ、と幸太は自慢げに話してくれた。

「ゴッホは赤い葡萄畑という絵画しか売れなかったんだ。今では世界中の人が大金を出して買っているのに。不思議なんだよね。ゴッホってさ」

幸太は画集を見せてくれた。それどころか画集をあげる、と言いだしたのだ。

「どうして。あなたの画集じゃないの」

「いや。もう誰かにあげようとしていたんだ。誰か絵が好きな人にあげようとしていて、京子がいたんだ。だから、あげる」

断れるような雰囲気ではなかった。幸太は何かを私に託すような表情をしていた。私は画集をもらった。あつて困るものじゃない。

「それと。絵がうまくなる方法って何か知ってる？」

「何？」

「名画を半年間。とにかく模写し続けるんだ。ただ模写をし続けるだけで絵がうまくなる」

小学六年生の私にとっては新鮮な情報だった。

三日間で病院を去ることができた。

私は幸太のおかげで絵の方向性が変わった。

ゴッホの画集を見るうち、描いてみようと思った。

幸太の言われた通り、名画を半年間模写するだけでうまくなるのなら、それをやってみよう。

私は来年のコンクールの作品を書く前に、この画集にあるゴッホの絵画をすべて模写してみようと考えた。

ひまわり。星月夜。夜のカフェテラス。

有名な作品から、自画像に至るまで。

ただひたすらゴッホの絵画を模写し続けた。

そう。すべては友輝に会う為。

友輝に認めてもらう為に。

私は描き続けたのだ。

中学生になってもゴッホの模写は終わらなかった。

ゴッホは生涯一枚しか絵が売れなかったのだが、何百枚という絵を残している。その絵を一つ一つ丁寧に模写していくことで絵の上達を目指していった。

部活は迷うことなく美術部に入った。

しかし私は美術部で挫折を二度味わう。

一度目は私よりも絵がうまい生徒が何人もいたということだ。どう考えても私の方が下手だった。私よりもデッサン力があったり、色使いが私には無いものがあったりと、私には無い才能がいくつもあった。

二度目は美術部自体、それほど真面目な部活ではなかったということだ。運動系の部活と違って、美術部には目立った大会がないし、団結して大会に向かう心構えもない。そのせいで目標を何も持たな

い人達が、適当に絵やマンガを描くの集まり、といった感じだった。それでも。

それでも私は描かないといけない。

認められない。

褒められない。

それだけだ。

私はただ黙々とゴッホを描き続けた。

その時が来た。

中学一年生の秋。

私が描いた絵がコンクールで入賞を獲ったのだ。

その絵はゴッホの作風を現代に生かしたらどうなるだろうか、と言う疑問から生まれた。ゴッホが描く絵は日本では幕末から明治に掛けてのヨーロッパだ。

それを現代の日本で描いたらどうなるか、試してみたかった。

ビルが建ち並ぶ日本に日の出が起こる。希望のある絵を描いた。

それが入選したのだ。

私は喜んだ。入選したから喜んだのもあるが、その絵が展覧会に飾られるからだ。

これで私は友輝に認めてもらえる。

そう感じたからだ。

絶対に友輝に出会えるという確証があった。

私は絵の前で待ち続けた。

「京子、久しぶりだね」

そう声を掛けたのは友輝、ではなかった。

「久しぶり。幸太」

学生服を着た幸太がいた。
でも。

その隣には、友輝がいた。

「久しぶり、友輝」

私はゴッホの画集をもらったあとに尋ねた。

ねえ、中田友輝って人、知ってる？

「中田友輝？」

うん。

「知ってるよ」

どうして知っているの？

「だって同じクラスだし。小二の時引越して以来、ずっと友だちだったから」

私は話した。友輝に私の絵を見てもらいたいのだと。認めてもらいたい、ということは言わなかった。

「わかった。じゃあ、もし絵が入選したら、一緒に見に行くよ」

幸太は約束通り、来てくれた。友輝を連れて。

「友輝。私。絵を描き続けたんだ。小学二年生の時、初めて褒められてからずっと」

友輝は私を遙かに超える背の高さだった。出会った当時は同じくらい背だったはずなのに、いつの間にか、追い越されていた。

私の絵を見ている。その目は、どこか遠くを見ているような目だった。

「それで？」

「えっと。どうかな？ この絵」

「京子。いい加減大人になれよ」

言葉とは裏腹に、表情は爽やかだった。クラスの中で、太陽だったあの頃と変わらない表情だ。

でもその言葉は。

「俺はもう絵には興味ないんだ。今日だって幸太に連れられてここに来たんだけどさ」

私にとって。

「またな、京子」

ひどく、重かった。

今までの苦労は何だったのだろうか。

私は絵を否定されたのではない。私自身を否定されたのだ。

その時、私はハッキリと気づいた。

絵ではなく、私自身を認めてもらいたかった。褒めてもらいたかった。

私は、友輝のことが好きだったのだ。

今更ながら気づいた。そして私の好意は届かなかった。

私の絵が、ひどく、陳腐に見えた。

「ひでえな。友輝」

幸太だけが私の傍にいた。

「幸太。私どうしたらいいんだろう。私の絵が凄く馬鹿らしく思えちゃう」

思えば私は認められただけの思いでここまでやってきた。二人の母親にはいつも認められなかった。友輝に初めて認めてもらった

けど、今、あつという間に遠くへ消えてしまった。

「ねえ。どうしてこうなっちゃうんだろう、いつも。私ってやっぱりダメなのかな？」

「ダメじゃないだろ」

俯いていた顔を上げた。

「なあ、何でオレがゴツホの画集をあげたか、知ってるか？」
首を振った。

「俺はゴツホが好きなんだ。ゴツホは生涯一枚しか絵が売れなかった。でも諦めなかった。絵を描き続けたんだ。俺も絵を描いてたけど、周りから無理だって言われて絵を描くことができなくなった。でもさ。一枚しか売れなくても、自分の作品を認めている。そんなゴツホが好きなんだ」

だから託したんだ。たとえ周りから絵が認められなくても、描き続けるようになって欲しいと。

そう、幸太は言った。

「京子はゴツホに似ているな」

私はそんな考えを持ったことがなかった。

人から認められることで。

友輝から認められることで、私自身を認められると、そう思っていた。

思えば二人の母親から認められなかったから、私は私を認めることができなかった。

でもそれは違う、と幸太は教えてくれた。

私が私の作品を認めることができる。

そんな風に。

私が私自身を認めてくれることができるんだ。

「ゴツホみたいだね。私って」

幸太はにこりと笑った。

「ただいま、京子」

仕事から幸太が帰ってきた。幸太は先月、プロポーズをしてくれた。

絵を描けなくなった少年が、ゴッホのような私にプロポーズをしてくれたのだ。

今、リビングには私の絵が飾られている。初めてコンクールに入選した絵だ。

どうやら私は本当にゴッホに似ているらしく、その後何度かコンクールに作品を出したが、一度も入選することがなかった。

私も一枚の絵しか購入者がいなかったのだ。

「この絵。幸太が買ってくれたんだよね」

「当たり前だろ？」

「うん」

私の絵が市から返ってきた後、幸太は千円札を出した。

「京子の絵、これで売ってくれない？」

その声は今でも覚えている。

京子、という響きを本当に、優しく感じた。

私は今、幸せだ。でも幸せに辿り着くまでには、様々な苦しみがあった。その苦しみを忘れたことは無い。たとえ幸せでも、この苦しみを死ぬまで忘れたくはない。

「やっぱり京子はゴッホに似てるな」

京子はゴッホに似ている、と彼は言った。そう。

私はゴッホに似ている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5799g/>

私はゴッホに似ている

2011年1月27日13時15分発行